特別な支援が必要な児童生徒の在籍する通常学級での授業における支援

はじめに

授業中、先生の話を耳を傾けている様子がなく、絵を描いたり別のことを考えたりしている。話は得意だけれど、漢字が正しく書けない。計算はよくできるけれど、図形の問題は苦手である。このように、学習面における気になる児童生徒について、「なぜなのだろう？」と悩んでいませんか。「本人の努力が足りない」などと誤解されますが、脳の機能に原因がある場合が考えられます。どのように理解し、どう対処していけばよいか、通常学級での授業に焦点を当てて、その支援について考えます。

Ⅰ　学習面における気になる様子はどこに原因が？　～カギとなる脳の働き～

学習過程で働く脳の機能が、児童生徒の学習に影響している場合があります。この脳の機能について知ることは、特別な支援が必要な児童生徒の学習面における気になる様子の原因や支援を考える上で、参考になります。ここで取り上げる脳の機能として、次の１～４があります。

【学習過程で働く脳の機能】

１　注意を持続して向ける　　**２　情報の全体像をとらえる（主に目から）**
３　情報を順にとらえ、記憶する（主に耳から）　　**４　見通しを立てて課題を処理する**

１～４の機能がうまく働かない場合に見られる様子を、例として以下にあげます。

１　注意を持続して向けることが難しい

「興味・関心のある物のところに行ってしまう」、「体や手足を動かしている」
「周囲の音で注意がそれる」、「落書きをしたり別のことを考えたりしていることが多い」など

２　情報の全体像をとらえることが難しい（主に目からの情報のとらえ方に困難がある）

「見本の字や絵を見てかき写すことが苦手」、「形の似た文字をよく間違える」
「図形の違いを区別したり組み合わせたりするのが苦手」など

３　情報を順にとらえ、記憶することが難しい（主に耳からの情報のとらえ方と記憶に困難がある）

「言葉で指示したことがうまく伝わらない」、「言われたことをすぐ忘れることが多い」、
「話に耳を傾けようとする様子が見られない」、「会話がかみ合わない」、「暗算が苦手」など

４　課題を見通しを立てて解決することが難しい

「時間がかかる方法をとることが多い」、「作文をうまく書けない」
「文章題を解くのが苦手」、「計画を立てて行動することが難しい」など

Ⅱ　授業での支援について

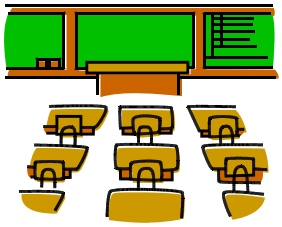
ここでは、前項であげた学習面における気になる様子に対応して考えられる支援を整理します。

１　注意を集中できるようにする

(1)　教室環境を整え、座席の位置を工夫する

・教室には授業に関係ない物を置いたり、黒板周辺に掲示物を貼ったりしないようにします。

・座席は廊下や窓際を避け、前の方にして、先生が注意を喚起し個別の支援をしやすい場所にします。



(2) 興味・関心がもて、分かりやすい導入の工夫をする

・授業で使用するものや関係のあるものを実際に見せて、興味を引きつけます。
・ゲーム形式やクイズ形式にするなどの工夫を取り入れます。
・習った簡単な復習を取り入れ、学習に取りかかりやすくします。

(3) 集中の持続の工夫をする

一時間の授業が、ずっと話を聞いていたり、映像を見ていたりするのでは、集中の持続が難しい児童生徒がいます。

・一時間の授業を、10～15分のユニットで構成し、操作や作業活動、話合い活動など変化をつけた流れを設定します。
・「見ながら話す」「聞きながら書く」など、二つ以上の器官を同時に使うことをできるだけ避けるようにします。
・用意された数種類のプリント類の中から、自分でチャレンジしたいものを選べるようにします。

(4) 見通しをもてるようにする

「これから何をするのか」が分からないことで、集中できなかったり、イライラしたりする場合があります。

・この授業の目標や課題は何か、分かりやすく示します。
・一時間の学習の流れを掲示し、今どこに取り組んでいるのか、どこまでやったら終わるのか分かりやすくします。

「はじまりの時間と終わりの時間を知らせる」「プリント学習は、何問できたら終わりにしてよいか伝える」などの配慮が必要です。

【一斉指導の中に個別の支援を】

※ 一斉指導の合間に、机間指導でつまずいている児童生徒を見つけ、個別の支援ができる時間を設けられるようにします。その間は、他の児童生徒は、「何をしたらよいか」はっきりさせておくと、どの児童生徒も落ち着いて学習に取り組めます。

2　情報の伝え方を工夫する

(1) 情報を順に（主に耳から）とらえ記憶することが難しい児童生徒には、次のように工夫します。

・指示は、児童生徒の発達段階に合わせて分かりやすい簡潔な言葉で伝えます。
・話は手短にし、話の内容を視覚的な手がかりで補ったり、メモに書いて渡したりします。
・文章や話に関係のある絵などを用意し、視覚から情報が入りやすくします。
・作業や学習の手順を、一つずつカード等にして順番に並べるなどして分かりやすくします。
・筆算の形と合わせて考え方を黒板に掲示しておくなど、思考を言語化するとともに視覚に訴えるようにします。
・メモを手がかりに分かって活動できるように、メモを取る習慣をつけるようにします。
・会話がかみ合わない場合は、話す内容をしぼって繰り返し、要点を押さえた話し方をします。

(2) 情報の全体像を（主に目から）とらえることが難しい児童生徒には、次のように工夫します。

・必要な情報に注目できるように、余分な情報を遮断したり、情報ごとに資料を分けたりします。

・文字や図形の形がとらえにくい場合は、文字や図形を大きくしたカードを用意します。また、点線で書き表した文字や図形を繰り返しなぞる運動によって、形をとらえやすくします。
・図形の特徴などを言葉で説明を加えながら、形や特徴をイメージできるようにします。
・漢字を「偏」と「つくり」など分かりやすいパーツに分けて、音声言語を取り入れながら形を捉えられるようにします。
・音読では、児童生徒のそばで教科書の行をそっと指差したり、一緒に声に出して範読したりします。

(3) 板書の仕方を工夫します

・黒板上や周辺には不要な掲示物を貼らず、集中できる環境を作ります。
・一番後ろの児童生徒にも分かりやすい文字の大きさで、簡潔に書き、色づかいを変えたり、大切な部分を線で囲んだり、下線を引いたりします。
・黒板を二分割、三分割して使うなどパターン化して、情報を整理します。
・書くことに抵抗がある場合は、書く量を調節し、抵抗感を軽減する工夫をします。重要度を番号で示すなどポイントを絞り、短い時間で書き写せるようにします。
・書き写す時間を取ります。

３　課題解決の仕方を示す

「課題解決の仕方」が分からなかったり、「課題解決」が遅かったりする児童生徒は、今まで得た知識や課題解決の方法を組み合わせて、合理的に早く処理することが難しいと考えられます。特に、算数・数学の文章題、作文などは、いろいろな場面での課題解決方法や表現を組み合わせて処理しなければなりません。物が整理できないことも課題解決の仕方が分からないことからきているとも考えられます。

・課題解決の仕方を「・・・のようにするといいよ」とモデルを示して、チャレンジさせ、できたときにほめると、自信をもって課題解決する姿が期待できます。チャレンジさせる際は、一人一人の児童生徒の実態に応じた課題のスモールステップ化を図り、取り組む時間設定を配慮したり、課題の質と量を考慮したりすることなどが必要です。

＜例１＞「作文をなかなか書けない」

①５Ｗ１Ｈなどのキーワードを与えながら質問をし、付箋紙にメモをします。
②付箋紙の順番を入れ替えながら書く内容を順序立てて構成できるようにします。選択肢のカードを用意しておき、その中から選んで文を構成するのもよいでしょう。
③イメージがもてるように、写真やビデオなどを活用することも考えられます。

＜例２＞「文章題を解くのが苦手」

①文章の意味を一つ一つ追いながら一緒に読みます。

②数字やキーワード（ぜんぶで、ちがいは etc）にそれぞれ印をつけます。

③問題を解く過程を絵や図に描いて示し、イメージしやすくします。具体物や半具体物を使うのも効果的です。

④解き方が分からない場合は、ヒントカードなどを使って解き方を示し、例題を出します。

＜例３＞「作業や操作活動が遅い」

①進め方の手順を図や表で示します。

②つまずいているところを確認して、進め方のモデルを示します。

Ⅲ　自己評価を高める支援について

努力不足でもなく、一生懸命やろうとしているのに、注意を集中できなかったり何をしたらよいか分からなかったりするために、うまく取り組めず失敗してしまう児童生徒がいます。この困っている状況の背景を理解してもらえず、親や先生から叱られ続け、「やっても、どうせダメさ」とあきらめてしまい、学習意欲を失っている場合があります。これは、自分に対する評価（自己評価）が低くなっているといえます。一時間の授業の中に「できた」「わかった」「やったー！」という成功体験や達成感・成就感を味わえるように支援し、よいところをほめるようにしていくと自己評価が徐々に高まっていき、学習にも少しずつ自信をもって取り組めるようになっていくことが期待できます。そこで、自己評価を高めるための支援の工夫について、以下に述べます。

(1) 児童生徒のやる気を高める

・児童生徒の話に関心をもち、じっくり話を聞く姿勢をもちます。また、親しく言葉をかけるようにし、他者から受け入れられている実感をもてるようにします。

・児童生徒の発言を補うようにフィードバックします。

・結果だけでなく、取り組んでいる態度や努力している姿勢など、過程に注意を向けます。

(2) 自分はできるという自信がもてるようにする

・できるところから始めたり、最後の仕上がりの部分をさせたりして、やればできる実感をもてるようにします。

・児童生徒が達成可能な問題数や内容の課題に取り組ませ、些細なことでも、できたときにほめます。（成功体験によるプチほめ）

・学級全体の中で、また他の先生、保護者からもほめられる機会を増やします。

(3) 自分は役に立つという体験を積み重ねる

・落ち着きがなくなってきたら、プリントの配布や職員室へのお遣いなどの手伝いを頼み、社会的に価値のある役割に取り組ませます。そして、できたときに感謝の気持ちを伝え、自分のよさが発揮され、役に立っている実感をもてるようにします。

【認め合える学級づくりへ】

※よい取組や行動が見られたら、どの児童生徒でもそのよさを認めてほめる教師の姿勢は、児童生徒のモデルになります。それは、お互いに認め合える学級づくりにもつながります。